



比喩を使いこなし

「伝える力」
をつける

15分読書で世界を広げよう

はじめに

いきなりですが、この本の目的を最初に伝えておきます。

(目的)

比喩の世界を知ってもらい、
比喩を用いて説明できるようになる

です。

比喩を使えると得られるメリットは2点だと考えています。

- ・ 相手を話に引き込める
- ・ 自分が楽しい

簡単に説明しましょう。

すでに会話での比喩の重要性を感じている人は読み飛ばして、いきなり本編を御覧ください。以下は、本を読む上でのモチベーション作りのためですから、モチベーションをすでに持っている方が読むと時間の無駄になってしまうおそれがあるためです。

ではまず前者を説明します。

比喩を用いることで相手の脳の中に「アニメ」を見せることができます。

いわば、ムービーつきの説明が口でできるのです。

成功した人物は相手に説くことを得意としているケースが多いのですが、その共通する特徴のひとつがこの比喩を使った右脳と左脳を刺激する説明方法なのです。

次に後者です。

「自分が楽しい」とはどういうことか。

物事はつまらないことでも、何か目的を自分で設定してやることで楽しくなることがあります。

会話にもその法則が応用できます。比喩を上手く使うという目的があるだけで、何気ない会話が自分の価値を高める刺激的な練習場になるのです。これは楽しいことではないでしょうか。

またこの本の特徴ですが、この本は**およそ20分で読み切れる分量**に設定してあります。

なぜか。理由は三点あります。

まず、電子書籍はそんなに長い時間読んでられません。やはり紙媒体よりもエネルギーを消費してしまいます。

二点目は電子書籍の場合、「しおりを挟んでまた続きを読む」のは億劫に感じられます。読もうと思っても、デバイスやPCを起動して、フォルダを開くなどのプロセスが必要であり、心理的な距離があるからでしょう。

三点目は紙の本のように見栄えを良くするために厚くする必要がないため、言いたいことだけを書くとその分量になるからです。

以上から分量はなるべく抑えて読み切るスタイルの本にしました。しかし、繰り返しになりますが、本当に必要だと思ったことだけを書くよう努めました。

最後に、持てる力を出し尽くして推敲致しましたが、誤字・脱字やお気に召さない表現等が残ってしまうことがあります。

一報頂ければ確認次第すぐに対処していきたいと考えていますので、よろしく申し上げます。

この本がみなさんの思考の材料となれば幸いです。

2011年8月

今からさまざまな優れた比喩を紹介していきます。何事も優れたものには学ぶことが多く、眺めるだけでも多くの利点があります。

「比喩の作り方の法則を見出して紹介する」という方法も考えられますが、この手の方法は法則を暗記しなくてはなりません。

暗記はテストのように時間のあるときには良いですが、いざという一瞬で使うことが目的の場合には適していません。

ですから、この本ではあくまで例を示すことで、比喩の世界に触れ、興味を持ってもらうという方法を取りたいと思います。

興味を持っていただくだけで良いのです。なぜか。興味が出ればおのずとそれを探し、脳が勝手に良い比喩を溜め込んでくれるようになります。私はこれを「**比喩発見アンテナ**」が立つと言っています。

このアンテナが立てば日常すべてが師となります。

友人との会話、ラジオ、本、テレビ内の芸人さん、駅のポスターなどに用いられている比喩が自然と目に入るはずですよ。

あとはこれらインプットしたものをアウトプットすれば良いのですが、これにはトレーニングが必要でしょう。

トレーニングといっても難しいものではなく、要は意識の問題です。会話しながら、なんとなく思い出したら使ってみれば良いのです。

間違っても、「一日一回は絶対使うぞ」なんてルールは決めないで下さい。脳は必ずそういう束縛を嫌って、反対の結果になってしまいます。

それでは本編をみていきましょう。

ケース 1 松下幸之助の比喩

はじめは経営の神様・松下幸之助氏の比喻を見ていきましょう。

・ダムのように経営する

松下幸之助氏はその経営方法を「ダム式経営」と称しました。

技術にしる、資金にしる、人材にしる、まるでダムのように余裕を持って蓄えておく、そしてそうすることによって安定した経営を実現させるというものです。

この「ダム」が比喻になっています。このダムを説明に用いることで、雨の日には水をいっぱいに蓄え、カンカン照りの日にはその水を使うダムの情景が目前に浮かびます。そして、その情景と経営とがシンクロ、画像と共に経営が理解できます。

このようにさまざまな場面で例を巧みに用いて説明をしています。

もうひとつ紹介しましょう。

・願うことが大切である

松下幸之助氏は仕事の第一歩としてもっとも重要なことは「願うこと」だと説きました。

普通だと、これで終わりでしょうが、ここに比喻を用いることでグッと「願うこと」の重要性が納得できるものへと変わります。

そう、かの有名な「はしご」の例です。引用します。

「たとえば堀の向こうに美しい湖水がある。ところが堀にさえぎられて見えない。それを見たいと強く求める人なら、何とかして堀の上に上がります。堀の上に上がりさえすれば、向こうにきれいな湖水が見える。だから、必ずはしごを探してくるだろうと思います。はしごを持ってくるのは見たいと強く念願する人だけです。」『松下幸之助 人生をひらく言葉』（谷口全平 PHP文庫）

願うことで行動が変わってくる。

行動が変われば結果が変わる。

ということをこの例で上手く表現しています。大事なことを伝えるときに「これは大事だぞ」

と言っても、相手の心にまで刻み付けることはできません。しかし、単純な内容であっても比喻を用いて説明することで「あ、これは本当に大切なことなんだ」と思わせることができます。そんな力があるのです。今回の引用はそんな例になったのではないのでしょうか。

ケース2 福沢諭吉の比喻

次は「学問のすすめ」や慶応義塾の設立などの偉業で知られる福沢諭吉です。

福沢諭吉の例はやや刺激的で、勢いがあるのが特徴です。

聞いている方からするとその比喻を聞くと、ハッと我に返る思いをするときがあります。

・蟻と同様？

『学問のすすめ』の中で一人間として独立自尊の精神を持つべきだと説く際、上で述べたとおり「確かに、このままではいけないな」と読む者に思わせる部分がありますが、その例をあげてみます。

福沢諭吉はまず一人の架空の人物を例に挙げます。その人物は就職も立派にし、マイホームも建て、結婚もします。また、子供も生まれ、教育も一通りやり、万が一の状況に備えて貯金もしている。

しかし、この人物は「蟻」以上でも以下でもないと実に軽快に切り捨てます。

自らの衣食住を整えるだけでは、蟻も同然であると説きます。

今回の比喻はこの「**蟻**」です。

この比喻を使うことで、人間としていかに生きるべきか、いかに志を立てるべきかという点を強調できると同時に、相手の感情に火を点けることができるのです。怒るようなことを意図的に言い興味を持たせる、これはかなり高度な比喻の使い方でしょう。しかし、それだけに破壊力がありますね。

・猫の如く？

『福翁百話』という隠れた名著があります。『学問のすすめ』や『福翁自伝』などは有名ですが

、それらよりもっと具体的に結婚のこと、人との交際の方法、世の渡り方などが書かれていて非常に分かりやすい本になっています。

『福翁百話』でも実に多くの比喩表現を用いて本質をえぐり出していますが、その中でも今回は出世の方法を「猫」の比喩で説いた箇所をご紹介します。

福沢諭吉はこの本の中で、出世するためには知恵を小出しに使うべきだと主張しています。

どういうことかというと、私たちは「これは自分の才能を発揮できない」「こんな仕事やっても意味がない」と勝手に判断し、「大きな仕事がきたら、自分の知恵（力）を使い尽くし、事を成そう」と考えてしまいがちです。

しかし、そうではなく、持っている知恵は対象が小さなことであろうと大きなことであろうと出し尽くし、結果を出さなければならない。ということを言っているのです。

しかしながら、このままではなんだかイメージが湧かない。そこで、「猫」の登場です。引用します。

「鼠を捕ろうとすれば、猫のほうから進むべきだ。鼠が自分からやって来て猫に接触した例は聞いたことがない。ただ、鼠を求めるだけではなく、蜻蛉でも蝉でも、見たら手当たりしだいに飛びかかり、日頃の技量を見せることこそが、猫の本分なのである。」『福翁百話』(福沢諭吉 金園社)

どうでしょう、「猫」がその獲物を捕まえようと持てる力をすべて出し、必死になっているムービーが脳内に流れたのでしょうか。

その猫の全力の姿勢と自分が重なり、説得力を倍増させます。

このように福沢諭吉の本の中には至るところにこういった工夫が見られます。

現在でもその名を知らぬものはいないという人物ですから、その知性は突出するものがあつたのでしょう。学ぶべき点はたくさんあります。

他にも福沢諭吉の比喩でおもしろいものはたくさんありますので、機会があれば是非書籍を購入してみてください。

ケース3 司馬遼太郎の比喩

「およそ20分」というタイムリミットに近づいてきました。ここまで読んでくださってありがとうございます。もうひと踏ん張りです。最後に扱うの作家・司馬遼太郎氏です。

作品はたくさんありますが、今回は昨年大河ドラマの主人公を扱った『竜馬がゆく(三)』(文春文庫)から引用してみたいと思います。

この中で竜馬が事を成す秘訣を語るシーンがあります。

「一つしかないからどんどん投げ込むんだ。一つしかないとおもって尼さんが壺金でも抱いているように大事にしていたところで、人生の大事は成るか」

この一つしかないものは命です。ふつう一つしかないものは大切にしています。

その大切にすることを皮肉も交えて「**尼さんが壺金でも抱いている**」と表現。おかしさを交えることで読者を退屈させません。

このおかしみを狙った比喩もかなり高度ですが、どうせ比喩を使うなら少しでもおもしろい方が良いでしょう。

この手の比喩が上手な人は、小説を読んでいる人に多いように思います。その道のプロの本物の表現に触れるということはそれだけでセンスを磨くことになるのでしょう。

まとめ

いかがだったでしょうか。

ここまで、三方の例を用いて説明において比喩がいかに大事かについて考えてきました。

良ければ上述した文章から「比喩」部分を抜いたらどうなるか考えてみてください。 本当の存在はそれがなくなったときに強く感じるものですので、この方法は比喩の持つ力を知って頂くのに有効だと思います。

是非今日から比喩をマスターして、「伝える力」を養ってください。

最後に

私は言語学を習ったわけでもなければ、なにか結果を出して成功したわけでもありません。営利目的の場合、私のような人間の本は売れないため本を出すこともできないでしょう。そのため、アイデアを世に出すこともできません。しかし、このたびこのようなすばらしいサービスと出会い、本を「出版」することができました。本当にありがたいことです。感謝申し上げます。

この本は「結果を出している人は比喩の使い方が上手い」というアイデアから生まれました。なんとか、自分のこの考えを立証できたと思います。この本を通して読者に「表現」という世界を新たに創ることができればと願っています。ありがとうございました。